大牧広の滑稽俳句（三）

小西昭夫

大牧広（敬称略）の滑稽俳句を紹介するのも今回が最後なので、少しまとめて紹介しよう。

麦焼酎元気に空がつくことも

裸木の裸の終り近づきし

絶壁を絶望と書く目借どき

大牧広の滑稽句の言葉から発想したものについては、これまでにも少し触れたが、この三句も言葉からの発想である。元気を空元気とすることで、正反対の意味にしてしまった可笑しさ、その空元気も麦焼酎を飲んでやっと出るのだ。次の句は裸の文字への注目。芽吹くことは裸の終りなのだ。この句はなんだか色っぽい。次の句は「絶壁」と「絶望」の文字の相似の可笑しさ。目借時じゃなくてもあるかも。

空あまり青くて股引更へにけり

俗物で結構甚平似合ふなら

甚平着てなにやら無駄に勃ちしもの

吾よりもすててこ疲れゐたりけり

大牧広の滑稽句で印象に残るのは、こういったいかにも庶民という衣類を詠んだものである。空が青いことと股引を変えることには何の関連もないし、今の股引なら外から見えるものでもないので余計可笑しいがお洒落だなあと思う。甚平が似合えば傑物でなくても俗物で結構というのも笑いと共に、そこに庶民の矜持も感じられる。次の甚平の句は説明がはばかられるが、こんなことまで笑いにするのかと感心する。自分も疲れているのだが、それをすててこを擬人化して労っている。すててこ愛も可笑しいが、作者の疲れを笑いの中でクローズアッ

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

プさせる見事な表現であると思う。

竹夫人売られ文教地区といふ

この句には大牧広の批評精神を感じる。竹夫人は夏に涼をとるために抱いて寝る円筒形に編んだ竹籠である。長さは一メートルから一メートル半ほどある。抱籠や添寝籠の別名もあるが、ダッチワイフと言えなくもない。実物と違って竹夫人にはそんな艶な響きがある。その竹夫人がこともあろうに文教地区で売られているのだ。実に怪しからぬことである。しかし、この句は文教地区という呼称を揶揄しているようにも読める。また、文教地区はそれでいいんだとも読める。何とも愉快な句である。

咳さへも正しく芸術院会員

この句にも大笑いした。果たして、正しい咳というものがどういうものか全く分からないのだが、いかにもそういう咳があるかと思わされる。この句は芸術院会員を揶揄しているというよりも、芸術院会員は大変だなあと労っているような印象も受ける。笑いの中で正しいとはどういうことかも考えさせられる句である。

春へ春へ列車は本気出しにけり

この句をみて思い出したのは福島泰樹の「二日酔いの無念きわまるぼくのためもっと電車よ　まじめに走れ」の歌であった。といって列車（電車）を擬人化していること、「本気」「まじめ」という気持ちを表現していること以外にはさしたる共通点はない。季節は本気（スピードを上げ）で春に向かうのである。この擬人化の滑稽感は見事である。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。